

第67回青少年読書感想文全国コンクール課題図書

	書名	内容
小学校低学年の部 (1・2年生)	<p>あなふさぎのジグモンタ とみながまい/著</p>	<p>ジグモのジグモンタは、穴ふさがきが得意な服の修理屋さん。でも、この頃はみんな新しいものを欲しがります。「穴ふさがきなんて、もう役に立たないんだ」。気落ちしたジグモンタは、気晴らしに森に出かけますが……。修理という作業をして、古いものを使い続ける意味とともに、物作りの喜びまでもが伝わってくるお話。すぐに新しいものが手に入る今こそ読みたい絵本です。</p>
	<p>そのときがくるくる すず きみえ/著</p>	<p>だれにでも きれいなものってあるよね。 きみは どう?ぼくは あるよ。 どうしても 食べられないもの。 「いまはきれいでも、いつかきっと おいしく食べられるときがくるさ」って おじいちゃんは いうけど、ほんとかなあ。</p>
	<p>どこからきたの? おべんとう 鈴木まもる/著</p>	<p>食べ物は、どこでできて、どうやって運ばれてくるのでしょうか? お昼の時間、男の子がおべんとう袋を開くと、おべんとうのほかに、おかずがどこからやってくるのかが書かれたメモが入っていて…。見返しにも文章&絵あり。</p>
小学校中学年の部 (3・4年生)	<p>ゆりの木荘の子どもたち 富安陽子/著</p>	<p>ゆりの木荘は、100年以上も前に立てられた立派な洋館。いまは有料老人ホームになり、サクラさんやモリノさんたち、6人の老人が住んでいます。春風が吹くある日、サクラさんはだれかが歌う手まり歌——時々聞こえる歌——を耳にします。モリノさんにいわれるまま、サクラさんがその歌を口ずさんでみると、ふたりは突然、子どもになってしまいました。そう、87歳のおばあさんではなく、10歳ばかりの女の子に……。それは、77年前の約束のために、「あの子」がサクラさんたちを呼び寄せたからでした……。</p>
	<p>ぼくのあいぼうはカモノハシ ミヒヤエル・エングラール/著</p>	<p>オーストラリアにはどうやって行くの? バスに乗る? ボート? それとも…。ドイツの男の子ルルスと、人間のこぼをしゃべるカモノハシのとぼけたやりとりが楽しい、ゆかいな冒険…</p>
	<p>カラスのいいぶん人と生きることをえらんだ鳥 嶋田泰子/著</p>	<p>みぢかな鳥、そしてきらわれものの、カラス。ごみをちらかす、黒くて不吉、大きくてこわい……など、わるいイメージばかりだけれど、本当はどんな鳥なのでしょう? もともとは森でくらしていたカラス。人の出すゴミにひきよせられて街へとおりてきました。しかし、街のくらしも楽ではありません。なわばりあらしいのきびしさ、子育ての苦労など、いがいと知られていないカラスの生活をほりさげます! カラスを愛する著者が語るノンフィクション。普段は気にもとめなくらい身近な鳥、カラス。でもよくよく調べてみると、驚くほど多彩な表情を見せてくれるのです。このを読めば、ゴミをちらかす嫌われもののイメージが変わります!</p>

小学校高学年の部（5・6年生）	エカシの森と子馬のポンコ 加藤多一/著	子っこ馬のポンコが行く。ここで、ポンコはほんとうに自由だ。すきなところへ、すきなように歩いていく。でもある日、川の水の声も、風の声もいつもと違う。それがおとなになるってということ？ 森の長老の木・エカシ、ここにいるのに体はどこにでもあるというカメムシたちが、ポンコにおとなになることを教えてくれる。——加藤多一が北海道の森で暮らす子馬のポンコの成長を、やさしくあたたかなまなざしで描く。
	サンドイッチクラブ 長江優子/著	夏休み、小学6年生の珠子は、無心に砂像を作るヒカルと出会う。強烈な個性をもち、成績もトップクラスのヒカルは「戦争をなくすため」…
	オランウータンに会いたい 久世濃子/著	インドネシアに生息するオランウータン。熱帯雨林保護のシンボルになっているものの、野生での行動はほとんど明らかになっていません。20年近くオランウータンを追いつける著者は、時には20メートルを超す巨木に登り、時には夢中追いかけてジャングルで迷子に。オランウータンの思慮深い目に魅せられた著者が、霊長類研究からわかった未来を作る知恵を、魅力的なフィールドワークを通じて伝えます

※課題図書のため、貸し出し期間は1週間とさせていただきます。

